

- ◎奈良県と三重県の県境、御杖村にある“みつえ青少年旅行村”に向かっている。針 IC で一人を乗せて 5 人でわいわい走行中、「コロナの最中に 濃厚接触は いけないよ」なんてことはどこ吹く風かな。
- ◎三峰山は、「毎度おなじみの」というぐらい何度も訪れている。今回は、「樹氷が見たい」ということと、車のタイヤチェーンの試運転、両方ともだめだった。三峰山、頂上付近は 30 センチぐらいの積雪、非常に寒かったが樹氷はなかった。4 年前に同時期に来た時には、御杖村に近づくとき家の屋根に、田畑に、白いものが見え始め、もっと近づくとき道路の上にも雪が積もっていた。その時は、雪用タイヤ装着車で行ったので、問題なく駐車場までたどり着けた。今日はお陽さんが道路に照りつけ、まったく乾燥している、最後まで景色は変わらずその状態だった。
- ◎3 時間足らずで到着、駐車場では 5 台ほど車が止まっていた、みなさん三峰山に登っているんだろう。我々も、靴を履き替え、スパッツをつけ、ザックに水と弁当を入れた。道路に設置された温度計は 3 度 C を指していた。
- ◎1 時間ほど登ったところから、「あれれ すべる」スローモーションさながらに頭からごっちゃん、「いてて」毛糸の帽子にガードされたおでこは難なく笑い声。「アイスバーン状態 乾いた土が凍っている、土の中の水分が凍っているんだろうが、見た目はただの土、ところがスリりと危険な状態。「オレは ずぼ足だ」と言っているがこのスリりはそんなことを言っていられない。
- ◎雪が出始め、風が吹いてきた。屋のサイレンが鳴っている、「もうすこし 避難小屋で メ シにしましよるか」薄暗い小屋に入り、弁当を広げた。オレは、「冬は 前の晩から 弁当を作っても 腐らない」相変わらずの玄米ごはんは胡麻パラパラ、野菜炒めの卵とじ、手製のパンに野菜たっぷりのサンドイッチを 2 個持ってきている。「相変わらず 食べるねえ」「岡村さんが 食欲無くなれば 終わりだねえ」ほんとだね。
- ◎もう 40 年前に買った 6 本爪のアイゼンを装着。これを買って阪口さんと 5 月の表銀座を縦走した。大天井岳の下り、尻をついて降りかけ、あわやスリり、習いたてのピッケルワークですぐに止まった時は、肝が冷えた。慌て、12 本爪を買って、それ以来お蔵入りしていた 6 本爪だ。
- ◎てっぺんにやって来た、1235 メートルと書いてある。上の方は風がなく陽気な感じ、雪は 30 センチほど積もっているが霧氷の雰囲気は一切ない、霧氷もつららも今日はダメなようだ。「こんなに暖かいなら 八丁平で 大休止をしましょうか」ここも半分地面が見える。「あれは 伊勢湾・・・？」なんだか海のように見える。下に林道も見え、中央構造線まですぐだ。
- ◎また道を間違えた。さあ帰ろうと進みだした、「あれれ おかしい こんなに下るとは・・・」間違いに気づき元の場所に引き返した。帰ってまじまじ地図を見て、「オレは 県境の尾根道を行かねば・・・」「三重県側に下ってしまった・・・」と反省している。1 時間強のきついアルバイト、「帰りはまっすぐ 帰ろう」とも来た道を下りだした。ザックザック、アイゼンの爪が凍った土に突き刺さり、心地いい音を響かせている。
- ◎年々体力が落ちている、今までなら平気ですいすい歩いていた所を、「なんだか しんどい よっこらしょ」という雰囲気になってきた。無理せず山を楽しもう。
- ◎「針で野菜を買いたい」車を飛ばしたが、店は 5 時には閉まっていた。名阪高速、近畿道を通って帰りついた。今はガソリンが 170 円、以前なら 5000 円の交通費が今は 8000 円近くかかった。

012 古事記 090222

- スサノオがヤマタノオロチ退治した話から“洪水と治水”が読み取れる。古代には蛇は水神であり、山神であり、雨や水をつかさどる神とされていた。雨はしばしば雷を伴うことから、稲妻が蛇の形に似て、雷神ともされていた。揖斐川は農耕に必要な水を供給すると同時に、しばしば洪水を引き起こした。洪水は一時的に農耕に被害を与える一方、肥沃な土地を生み出した。
- 草薙の剣：スサノオがヤマタノオロチを退治した際、オロチの身体の中から出てきた剣。「おお 素晴らしい剣ならば 姉の アマテラスに 献上しよう」
- 八咫の鏡（やたのかがみ）・八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）・草薙の剣、この三つが、三種の神器と言われ、正当な皇位の証しとして歴代天皇に継承されている。八咫の鏡と八尺瓊勾玉は、アマテラスが天岩戸に隠れてしまう物語に登場する。
- スサノウとクシナダヒメは結ばれ、後々オオクニヌシが生まれる。

- ◎ここで古事記伝に、本居宣長に。

本居宣長が古事記の冒頭の文章をこのように読んだ。宣長が決めたと言ってもいい。 子安宣邦：阪大の先生

天地初發之時、
於高天原成神名、
天之御中主神
訓高下天、云阿麻。下效此、

アメツチの 初めの時
たかまの原に 成りませる神の み名は
あめのみなかぬしの神

次高御産巢日神、

次にたかみむすびの神

次神産巢日神。

次にかみむすびの神

此三柱神者、
並獨神成坐而、隱身也。

このみ柱の神は
みなひとり神なりまして身を隠したまひき

4行目の漢字、「訓高下天、云阿麻。下效此、」これの存在の意味は？読まないのかな・・・？

柿本人麻呂の有名な歌。いつも行く山、東吉野や御杖に行く時は、宇陀をって行く、歌の舞台が宇陀あたりから、いつも登る山の方を見ての歌かな、と思ひめぐらしている。歌の原典は、下記の漢字が15個。音読として漢字を使ったのなら31個が必要なのでは・・・この歌の読みは、本居宣長が師事した賀茂真淵の訓読に今も倣っている。実際にこの歌の通りに読めるかどうか、今も不確実である、と学者先生。

東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ
東野炎立見所見而反見為者月西渡

- ◎ かの契沖が歌ぶみの説になぞらへて、皇国（みくに）のいにしへの意（こころ）をおもふに、世に神道者といふものの説く趣は、みないたくたがへりと、はやくさとりぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねを、かむがへ出む、と思ふころざし深かりしにあわせて、かの冠辞考（賀茂真淵著：歌学書：記紀、万葉集の歌）を得て、かえすがえす読み味わうほどに、いよいよころざし深くなりつつ、此の大人（うし）をしたふ心、日にそえてせちなりにしに、・・・
- ◎ 本居宣長“30歳過ぎ”は、旅の途中松阪に立ち寄った賀茂真淵“70歳前の老大家”と面会する。「松阪の一夜」と題され尋常小学校の教科書にも載っていたらしい出来事。

013 石器時代 130222

海部陽介著<サピエンス日本上陸：3万年前の大航海>

◎日本人が、どこから来たのか、どうして来たのか、新しい情報というか学説がいろいろ出てくる。著者は台湾から沖縄の島々に人が渡った、海を越えた、どういう方法で渡ったか、ということを実際に実験した方の話だ。この話を読んでいて、「TVで見たぞ・・・」おぼろに思い出された。

◎日本人のルーツはどこだということていくつかの本を読んだ。

顔がそっくりということで、ロシアのシベリアの真ん中あたり、わざわざ長時間かけてルポをした画像を見たことがある。

氷河期、北海道とサハリンが陸地で繋がっていた、マンモスと一緒にシベリアから歩いてきた。

同じく氷河期、朝鮮半島と対馬、九州はなんとか海を渡れたのではないか、石器人が海を越えてやってきた。東アジアから、人々が海を渡ってやってきた。

◎60万年前、日本海は大きな湖だった。2万年前の氷河期、130センチ水位が低下して、北海道とロシアは地続き。古本州はひとつの陸地。北海道にはマンモス。古本州には、ナウマンゾウ、トラ、ヘラジカがいた。

◎著者：最初の日本列島人は、当時陸続きだった大陸から歩いてやってきた。これは一昔前の誤ったイメージだ。3万年以上前、祖先たちは何らかの手段で海を越え、日本列島にたどり着いた。水平線の先にある見えない島の存在を、彼らは知っていたのか。世界最大級の海流、黒潮をどうやって超えたのか。そして、それほどの難関に立ち向かってまで、なぜ海の向こうを目指したのか。

◎ちょっと気になることがある、「今までは すべての文明文化が 中国大陸からやって来た 中国大陸が先生で 日本人は生徒だった」ところが最近学説の中で、「日本はすごい 日本が一番だった」という話がぽつりぽつりと出てくる。日本人が一番と言われると、日本人のオレとしても決して嫌悪感はないが、今まで、「すべての 文化文明は 古代は中国大陸から 近代は西洋諸国から・・・」と教え込まれた世代のものにとって、「ほんまかいな こんなことを言っている方々は 妙な 国粋主義者 突っ張り学者・・・」なんて思ってしまう。土器、漆製品は世界一古い。日本列島には中国大陸より早くホモサピエンスがやって来た・・・

◎古代の人の航海術、それは、陸、太陽、月、星、風、波、雲、鳥など自然を読み取って進路を定める航海術、「伝統的ナビゲーション」である。3500～1000年前に台湾、東南アジアから太平洋のほぼ全域に広がっていた。鳥：カモメ科のアジサシは毎日陸に帰るので陸に近いことがわかる。グンカンドリのように飛びながら寝る鳥も いるので要注意。

◎旧石器時代の祖先たちは、なぜ海の向こうの島を目指したのか。海は魚介類や海藻といった食物を与えてくれ

る半面、すべてを飲み込んでしまう圧倒的な力に対して、「強力な怪物や野蛮な神々が潜む場所 祖先たちがいる死の世界」敬意を伴う恐怖の気持ちを抱いていた。

◎琉球列島には隣の島が見えないところが二か所ある。台湾から与那国島の間、ただし台湾の山の上からは与那国島が見える。宮古島と沖縄島の間、220 キロ、山に登っても島影が見えない。

◎この時期朝鮮半島、対馬海峡、神津島、インドネシア、ニューギニアで人々は海を渡っていた。三万数千年前のホモサピエンスの世界に大拡散、世界に大移動、新天地には青い鳥がいると思ったのか、すごい冒険だ。

014 古事記 140222

三浦佑之著<古事記を旅する>

◎あっちに行ったりこっちに行ったり、本の題名の旅にかけているわけじゃないが、オレの興味がおおいにぶれておりますということです。軽〜く読める旅の本、難しい古事記を読むにあたって、たまにはいろいろ楽しみながら、という本である。ヤマタノオロチから先に進まず“出雲”“国譲り”の話がまだ頭にしっかり入っていない。読んでいくと、出雲の国、今でこそ島根県は過疎が進む場所だけれど、弥生時代、古墳時代は一大勢力圏、なんだかすごい国があったのではとロマンをかきたてる。

◎ヤマタノオロチから、民俗学の話を読み出す。中国地方の鉄の話が出ていた。若い頃に広島に何度も通った、新幹線に乗りながら中国地方の山々は大きな樹木が少ない、なんでかなと思っていた。中国地方の山の中で鉄を作っていたのは江戸時代まで、明治になると、鉄は国家なりの掛け声で、輸入鉄鉱石、大きな溶鉱炉で鉄は作られていったと思うが、それまでの1000年以上、砂鉄と木炭で鉄を生みだしていた。鉄を溶かす木炭の量は、樹々の量は半端なものじゃないと推測する。山の樹々が育つサイクルを計算して、製鉄をしていたと思うが、それでも樹々がきり切られ、50年100年して育ったかなと思ったらまたまたきり切られたのだろう。

◎2000年の新聞各紙が、「出雲大社の境内から巨大な柱が発掘され 古図：金輪造営図に描かれているのと同じH48メートルの神殿が実在した」ということを報じた。古図では、三本の大木を組み合わせ、直径3メートルの柱を9本作り、3本ずつ、3列に立ち上げ、その上に神殿を造る。だれも信じられなかった空中神殿が、巨大な柱の発掘でにわかに現実となった。ゼネコンの大林組が復元作業を試みている。

◎アマテラスの命によって高天原から派遣された“タケミカヅチ”が国譲りを迫ると、息子コトシロヌシは承諾し、タケミナカタは抵抗するが敗れて諏訪に逃げる。

オオクニヌシ「わが住処だけは 天つ神の御子が 代々に日継ぎし お住まいになる ひとときは高くそびえて日に輝く天の大殿のごとくに 土の底なる磐根に届くまで宮柱をしっかりと掘り据え 高天が原にも届くほどに高々と氷木（屋根の干木的一种）をたてて始めたまえば われは 百には満たない八十の隅の その一つの隅に籠り鎮まっておりますぞ」 壮大な住処の造営を要求し、造られたのが出雲の神殿だという。

◎歴史、考古学から見て、出雲の地の巨大な柱が、空中神殿が聳えていたのは、ヤマトと関係する以前からであった。記紀はヤマト中心史観で書かれているが、違う文化、勢力圏があったのでは。巨木をたてる文化は三内丸山、諏訪、にもある。四遇突出型方墳や素環頭鉄剣などは日本海沿岸地域から発掘されている。

◎四遇突出型方墳：方墳の四隅がヒトデのように垂れている。山陰、北陸に多い。

◎素環頭鉄剣：刀剣にはいろいろ形があるようだ。手元の柄に、丸く加工してある太刀を環頭鉄剣と呼ぶらしい。環頭に装飾のないものが、素環頭と呼ぶらしい。

◎出雲風土記：巖戸：磐やのうちに穴あり 人 入ることを得ず 深き浅きを知らず 夢にここの磯の窟やのほとりに至らば必ず死ぬ 故 くにひと 古より今に至るまで 黄泉の坂 黄泉の穴 といふ

◎西郷信綱：神話学者：古事記の世界観では、天空の高天が原につながる太陽の昇る東の伊勢に対して、出雲は陽の沈む暗黒世界として黄泉の国につながっている。

◎出雲の側から見ると、天空なり、海のかなたなり、文化的な出自が違い、垂直的な世界、水平的な世界が溶融したような、いくつもの異界に囲まれた出雲の存在ではなかったかと思わされる。

- ◎ひんがしの 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ
- ◎車を運転しながら東の方の山を見ている、陽炎ではないがぼんやりしている。朝6時に家をでた。9時半に、東吉野村の“たかすみ温泉”を目指している。まだ6時というのに大阪の道路は車が数珠つなぎ、ちよつづつ時間が経って、ちよつとずつラッシュアワーに近づき、なかなか車はスムーズに走れない。大和高田、檀原、桜井、宇陀、東吉野と進む。今日は高見山だ。
- ◎道路に積もっていると嫌だな、凍っていると嫌だな、東吉野村に近づいても雪はまったくなかった。
- ◎9時ころに駐車場に着いた、三宅さんはまだのようだが着替え始めた。10時に歩き始めた。陽は燦さん、道も川も山もお陽さんの熱で湯けむりを上げているような雰囲気だが、昼頃から曇ってくるという天気予報だ。雪はまったくない、陽の当らない北斜面にも白いものは見当たらない、「今日も樹氷とは縁がないか」
- ◎1時間ほど登ってきた。先ほどから雨のようにポタポタ水が落ちてくる。スギの植林の上に載った雪が融けて、ポタポタなのだ。「カメラが濡れる」Mさん大きなカメラをむき出しで持っている。オレは袋に入れて腹のポシェットにおおしている。
- ◎ちよつとスタイルを紹介しますと、ザックを背に、ポシェットを腹に付けている。ポシェットには、袋に入れて一眼レフカメラ、1リットルのボトル、ライト、薬、歯ブラシ、ナイフ、箸・・・と入れている。
- ◎この登山道は面白くない、嫌だな、なんでかな・・・と思いながら登っていた。同じ道を帰る時も通って気づいたことは、階段だ。ていねいに階段を作ってくれている、その階段が歩くリズムと合わない、登山が楽しめない。去年、近所の釈迦ヶ岳に前鬼から登った時、「階段が ○○段あります」と表示されていた。その階段は○○の数字は忘れたが、そんなに階段があるのかと驚くほどデカイ数字だった。ただ釈迦ヶ岳の階段は、階段を20段ほど登ると、土があり、坂道があり、普通の道があり、マタ階段、またはしごと、バラエティに富んだ登山道、そういう階段の並び方だったのに比べ、ここは1時間ずっと階段が続く。一生懸命作っていただいて、文句を言ってゴメンチャイ。
- ◎村が造った看板になんと、記紀の話かな。桓武が熊野・伊勢を経てこの高見山で軍事評定、宇陀の一族：兄猾：えうかし：の情勢を見たのだそうだ。
- ◎上の方に登ってきた、雪が深くなりだし凍っているところもある。今日は12本アイゼンを持ってきているので装着。「アイゼンなんて いらねえ ずぼあしで じゅうぶんだ」なんてすごんでいたが、雪の中、アイゼンを履くと、雪をがっちりつかんでくれる、安定する。天気予報通りに雲が多くなってきた。
- ◎「もう てっぺんだ すぐだ」と思いながらも時間がかかった。風がある、冷たい、なんと樹氷が少し残っている、樹々の幹に枝に白いものが突き刺さっている、いいなあ、やっと見れた、これが見たかった。空はだんだん明るさが無くなってどす黒い様相になってきた。このあたりは、雪が50センチぐらいい積もっているのか、まったく融けていない。
- ◎避難小屋がありそこに入った。小屋と言っても扉はなく、屋根が展望台で三方が囲まれ、ベンチがある。かろうじて雪がかぶっていないベンチに腰掛け弁当を広げた。弁当とサンドイッチは昨夜のうちに作った。弁当は、玄米飯に梅干しと黒ゴマ粒。野菜炒めにベーコンと卵を入れた。一口めは冷たいと箸が動かなかったが、二口、三口、うまい美味いと完食。後ろに温度計があり氷点下の少し下だった。
- ◎今回は、菓子パンが二つ、手造りサンドイッチが二つ、リンゴ、チョコレート饅頭を二つ持ってきた。チョコレート饅頭はいたく美味そうだが潰れやすいので、駐車場に着いたところでMさんと一個ずつ喰った。手造りサンドは、野菜の酢のものを敷き、バナナやリンゴを並べたもの、登りと下りの行動中に一個ずつ喰った。バナナを2本いただき登りの途中で一本、帰りの車中で一本いただいた。駐車場に帰り着いて、オレは鍋でラーメンを煮て喰った。Mさんは、「至福にひと時 風呂だ」横の温泉に行ったのでそのまま分かれた。家に帰っ たら風呂に入って全部着替えたい、途中で風呂だと嫌だな、いつもそういつてる。「温泉でも 家でも 着替えは一緒じゃない」「なんで 温泉 きらいなの・・・」いつもそういわれる。
- ◎てっぺんの小屋で、二三人の方といっしょだった。こんな日でも人気の高見山は20人ぐらいの人と会った。同年輩か少し若いかというジジイの単独登山も3人ほどおられた。
- ◎樹氷はてっぺんの少し下あたりが一番きれい、これで陽が照り青空があると、青と黒と白、三色がいばりあって目に飛び込んでくるのだけれど、薄暗い空では、一色が事欠きまいちの迫力だが、ま、念願の樹氷が見られたことで満足満足なり。
- ◎避難小屋の中、二人の方がそれぞれコンロで湯を沸かし、ヌードルを食べていた。寒い中で湯が沸かせる、暑いものが喰え飲める、これはいいんだけど、重い邪魔くさいと最近はずボラをしている。
- ◎階段を延々と下っている、どんどん、えいえい、下っている。面白くないねえ、階段は。登る時にも、なんだかおもしろくない山、と思ったのはこの階段のせいなのか、いずれにしても面白くない。

◎先日来、漢字のこと、字のことが頭の中でゆらゆらしている。日本では3万年以上前からホモサピエンスが暮らしていた。3.7万年前という学者もおられる。ホモサピエンス以外の人類は近隣の大陸にいたらしい、これらはホモサピエンスではなく、原人と言われる人の仲間なのかな。ネアンデルタール人が言葉を持っていた、話していた、これはわからないが、話していたんじゃないかなと思っている。3万年前に渡ってきた元日本人は、もちろん話をしていて、家族があり友があり、好きになったり嫌ったり、泣き笑いの日々を送っていたと想像している。それこそ現代人と同じように、難しい話、行き違いの話、誤解曲解の話、はたまた他人への賛辞や、おべっか、おべんちゃらもおおいに出していたのでは、そんなこんな話をしていてはないのかな。ところが、ところが、大問題、文字をもたなかった、記録がない、書き残されたものがない、すべての話は口承伝承だった。文字の値打ちがわかり過ぎの我々にとても字がない世界は想像がつかない。

◎アジアの国々の漢字文化、漢字文化圏はいくつかあったが、現在漢字を常用文字として使っている国は、中国、台湾以外では日本だけらしい。ベトナム、朝鮮半島では、廃止をしたり、消えてしまったり・・・。

◎本居宣長の古事記伝より

◎皇大御国は、天地の間にあらゆる万の国を御照らしまします。天照大神のお生まれまする本つ御国にして、すなわちその御すえの皇統…皇国は万国に優れた国であるゆえ、この国の音声言語は正しいのだと宣長は言う。「正しい国のものゆえ その言語は正しい」<宣長さん、しっかりして・・・。>

◎古事記に見だしているのは、口承により伝えられた神々の言葉、言語のさま、口承伝承が古事記の記述。

◎古事記は、「読むよりも 聴く 歌のように 流れのように 感じる」これがいいのかもしれないね。

◎古事記にはたくさんの神々が登場する。その名前を聴いてみると、音が素直に入ってくるやも。口承とはそういうものだろうね。」

◎本居宣長：神：そもそも迦微はかくのごとく種々（くさぐさ）にて、貴きもあり賤きもあり、強くもあり弱くもあり、善きもあり悪しきもありて、心も行（しわざ）もそのさまさまに隋ひて、とりどりにしあれば、おおかた一むきに定めてはいいがたき物になむありける。

◎皇国：こうこく：すめらみくに：天皇が治める国。敗戦まで日本の異称として用いられた。

<このような話が出てくると、オレのテンションがぐぐ〜と下がる。今でも周りには、「天皇様」と異様に敬語を使って、敬い崇拝する方がいる。ただ、好きだという以上に異様さを感じる。オレは天皇家にしる、寺社仏閣に住まう人々にしる、そっとしておきましょう、関わらずに・・・である。宣長に対して、よくも古事記をここまで読めるようにしてくれたという尊敬はあるが、尊王はやだね。「日本人なら 天皇のために・・・」という異様な思想に走っていった記憶がまだまだ生々しい。>

◎本居宣長が古事記に表記されている漢字音の正確な訓みを研究している。古くからの口承の伝承が古事記の漢字表記。そこに記されている古の口承の伝承を古語のまま訓み下さねばならない。

◎漢字や仮名のこと、縄文時代から受け継がれた日本語、たぶん基本的に同じ系統が延々と続いていると思う日本語、この日本語を、漢字を使って、「漢字かな交じり文」これを使いこんでいなくなっちゃ・・・である。

◎さて漢字の話。

1世紀には金印や銅銭が来ている。金印：「漢委奴国王」銅銭「貸泉」ともに中国製。

5世紀には銅剣や銅鏡が来ている。漢文で書かれた書物が入ってきた。

6~7世紀には儒教、仏教、道教が来ている。

7~8世紀には万葉集、記紀、風土記が出てきた。

◎万葉仮名の歌

よのなかは むなしきものと しるときし いよよますます かなしかれけり
余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊与余麻須万須 加奈之可利家理

◎奈良時代は漢字の時代、ひらがな・カタカナは奈良時代以降。

◎中国で紀元前1300年ころ、3300年くらい前に甲骨文字がもっとも古いとされている。

◎中国では、一漢字・一音節 愛は 中国では ai の一音節だが、日本では、アとイの二音節。

◎和製漢字：峠。辻。畑。躰。鱈。鰯。

- ◎車で富山に向かっています。「久しぶりに 雪かきに 行って もらえますか」上西さんからのメールが来た。冬に入って今年は雪が多そうだというニュースは流れていた。10年前から毎年2月に富山のUさんの生家で、今は空き家に雪かきに行っていた。ところがこの3年4年雪が少なく、「雪かきに 行かなくてもいいみたい」となっていたが、「今年こそは 雪が ある」「2月20・21・22日の 三日間 いかが」ということで、車は湖西道路、比良付近を走っている。「雪 ないですねエ」比良山上の琵琶湖パレーには雪があるようだが、麓の道路付近には雪はまったくない。この3日間、北陸地方は雪マークの曇り空だ。
- ◎滋賀県と福井県の国境峠を走っている。景色が一変する、2車線の細い国道161号線の両サイドから水がピュンピュン飛んでくる、これは融雪装置の水、斜面はたっぷり雪の壁、これならこのスキー場も、可マークだね。このピュンピュンも久しぶり、一瞬前が見えなくなり、トラックの大しぶきを被り爽快である。
- ◎ガソリン高騰の折、ケチケチ旅なので、敦賀から今庄に向けて地道を走る。今庄のあたりはスキー場のある処なので、国境と同様に雪が残っている。雪道運転は慣れていないのでゆっくり走っていたが、慣れてきてスピードも出せるようになった。ただ朝晩の冷えた時間、地面が凍るといやだね。
- ◎半分高速道路も使い金沢市街に出た。目的地は国道304線沿いの高窪集落で金沢市内から10キロ、県境から1キロ足らずのところだ。金沢市内を走りながら、「雪はないね ちょっと積み上げたところはあるが ないね まさか 家にも雪が無かったりして・・・」という雰囲気である。
- ◎朝7時に家を出て、1時ごろに目的の家近づいた。U家は道路から50メートルほど離れている。村は過疎化が進んでほとんどが空き家の状態なので、そこまで除雪をしてくれない。雪が降れば除雪車が日に何回も往復する。前もってその50メートルの除雪を頼んでいたらしく、家の近くまで車を寄せられた。車に積んだスコップで、ドアまでの10メートルの雪を除けていく。金沢市内で長靴に履き替えていた。4年ぶりの雪の感触、「えええ 今年はやさしい 降って まなした」スコップがすっと入って、ふわりと捨てられる。
- ◎ずっと車で座ってきたので、早速スコップを握って雪かきを始めた。「おお わかってきた 思い出してきた・・・」ダンプという名称の塵取りの大きなものを、雪に押し付け、雪をすくい、くるりとうまく回転して横の川にざぶりと捨てる。例年は降ってには積もり、徐々に固まり、鉄のスコップに力を入れてもなかなか崩れない硬さだったが、今年はまだまだ新雪、アルミのスコップがさくりと刺さり、そのままスツと身体を回転させて川に向かえる、「これは楽だ 今年はやさしく終われそう・・・」と進んでいくが、1メートルも積みあがった雪の量はなかなかのもので、ちょっとずつしか進まない、早くは終われない。
- ◎2時間ほど“えっちらほい”の作業で玄関西面の雪がほぼ平らかになった時点で、コーヒーとおやつ、美味しい。この時はまだ靴下が湿っているな、冷たいなというぐらいだった。以前は登山靴にスパッツをつけて作業をしていたのを思い出した。登山靴は脱着がじゃまくさい、時間がかかるが雪対策としてはほとんど完璧、それでも長時間雪の中に靴があるとジワリ湿ってくる。登山靴は一度湿るとなかなか乾かない。
- ◎次は東面にかかる。古い雪は多少固い、瓦から滑り落ちた雪が一月二月と積もり、じんわり締められ、ほどほどに硬くなっている。以前は鉄のスコップでおもいきりすくっていたが、今日は硬いとはいえアルミのスコップで何度か差し込むとすく取れる硬さだ。
- ◎最初の失敗は、長靴の中に雪が入ってしまった。ずぼりと深みにはまり、「あちゃあ しまった」と思ったときには遅かった。樹につかまって中の雪を出したが、出し切れず、時間が経つにつれその雪が凍りだし、足がチンチン冷えてくる、「やばいぞ」と考えながらもスコップをすくっていたが、氷の冷たさが腰に来て力が出せなくなってきた。「まさか こんなことで 作業が できなくなって しまうのでは これが 歳なのかな・・・」早々に作業を切り上げ、ストーブの前でびしょ濡れの靴下を脱ぎ、新しい靴下をはき、足の裏にカイロ貼り温めた。
- ◎もう一度出て東面をやり始めた。4時ころになって陽がかげり始め、黒い雲が出てきた。温度が急に下がってきた、「寒いな つめたいな」とスコップをふるっていたが、雪の降りがきつくなりだし、どんどん降ってくる。この降り方では一晩で50センチぐらい積もるのではという感じ、「今日はこれぐらいでやめとくか」今回も、最近に比べ雪が多いと言っても、温暖化のさなか、たいしたことはない。到着した日の3.4時間でほぼ3面が終わり、明日は午前中でなんとかなるのではという楽観ムードである。
- ◎足がチンチンする、在宅中、「足が ちみたい」なんていいながら外出するとすぐに尿意がやってくる、頻尿である、これはいたくみともない。今回は雪の中、ゴム長靴の中に雪が入ってなくても冷たいのに、靴下がびしょぬれ、中の雪が凍っている、その冷たさが膝へ腰へ、がははのオジン体質、「明日 一日 大丈夫かな」と訝り怪しみつつも、足を温めカイロを貼った。翌日はカイロを足の裏と甲に貼り、乾いたゴム長靴を借りた。「ああよかった なんともない 作業ができる」普段通りに身体が動いた、これにはオレの身体君に感謝である。

- ◎二日目：朝6：30ころ目覚めた。「雪は降ったかな 積もっているかな・・・」昨夜は、9時ころに寝たがその時間には相当な勢いで降っていた。朝の時点で降ってはいないがまっ白な雪が、昨日スコップで削り取った上にふわりかぶさっている。朝飯前にとスコップでそのフワリをすくってみると、それこそフワリフワリ、見た目の量はすごいけど軽い綿のような雪の量がたちまちスコップで蹴飛ばせる。道までの10メートルを「よっこらしよっこらしよ」とスコップで掻き分けすぐに昨日終わった時点の高さまで雪を蹴散らすことができた。7時ころになって空は明るく晴れ日和を予感させる雰囲気、「これなら今日は いい感じで作業が進みそう」と思っていた。
- ◎昨日からのTVでの天気予報では、珍しい天気図を見たと思った。北海道を中心に蜘蛛の巣のような円が日本列島を覆っている、“まる・まる・まる”の形が日本の上に描かれている。「低気圧が発達して 北海道を中心に日本海側は 猛吹雪になる見込み」「風速30メートル 40メートル 風が吹く」「車の運転は ひかえてなるべく 家の中で 過ごすように」と恐ろしい話、アナウンサーの声が流れてくる。
- ◎北陸、富山のこのあたりは、穏やかな午前中だった、曇り空だけれど、雪も時々降るけれど、風もなく、セーターひとつでスコップを振り回していた。それはそうだけれど、やはり歳だねえ、1時間もすると息があがり、スコップの手を休めている。以前は疲れ知らずに重い雪を“がりがり”やっていた、あまり休まずに鉄のスコップを振り回していた。今日は靴下の上と下にカイロを貼り、ゴム長靴を履いている。ずぼり潜りするようなところは慎重に探りを入れ、一步一步あるいている、足元が暖かいと作業がはかどる、グイグイとスコップは振り回せるとはおおげさ表現だけれど、今年の軽い雪はいつもより楽にはかどる。10時頃のおやつタイムには、「もう ちょっとだねえ」ということが言えるようになった。
- ◎竹のあたりで作業がゆっくりになっている。京都のタケノコ山のようなでかい竹が20本30本ある。1本だけぐにやりと曲がって先端が雪の中にある。今掘っているあたりに竹の先っぽが潜り込んでいる。竹の反発力はすごい、下手にノコギリなどを入れると、びゅ～んと跳ね上がり大怪我をするかもしれない。いくら掘っても先端には届かない、「ま いいか これぐらいなら許されるだろう」というところまで掘り下げて次の場所に移った。午後の話だが、ノコギリを借り竹の先端を切った、ばっさ、びゅ～ん、雪を跳ね飛ばして竹が天を指した、復元した、もとの姿になった。
- ◎8時から始め、10時ころにコーヒータイムで持参のパンとワッフルを喰った。靴下に貼ったカイロのおかげで体調はすこぶるよし、天気も雪はひどくは降らない、寒くはない、このままいけば昼過ぎには、「ま これぐらいで よし」「もうこれから雪が降ってもたいしたことはない もうすぐ3月 それからは雪も融け始めていいか 終了か・・・になりそう」おやつを喰って外に出ると、雪が降りだした。「雨が ざあざあ 降る」この表現の、雪の場合はなんていうのかね、ジャケットのフードを被らなくっちゃいけないぐらいの降り方になってきた。
- ◎12時過ぎに予定通り、家の四面の雪をある程度に除けることができた。スコップやらダンブやらの人力でやる雪かきは、なかなかの重労働、終わって“ほっ”の状態だ、ご苦労様でした。4年前まではこの雪かきが楽しみだった、身体が動き、スコップを振り、雪が少なくなってくると、家の土台が見えてくると、そりゃあうれしかったが、歳だねえ、「しんどい シンドイ ああ たいあーど」という言葉が出てきた。
- ◎北陸地方の街中で何度か見たのが、小型除雪機。乳母車ぐらいの大きさの機会が、そうだ、たいがい赤色塗装、上に向けて雪をまき散らしている。たまたま歩いている時に除雪をしている人を発見、まじまじ見ていた。ホンダ製のもの、膝ぐらいに積もった駐車場の雪を、巾50センチぐらいでゆっくり押していくと、たちまち地面が見え雪を前方にまき散らしていく。「硬い雪でも 大丈夫・・・?」「性能がいいから 少々硬くても・・・」「もっぺん やってみて」あんちゃん嬉しそうに操作していた。豪雪地帯ならあれは必需品だね。このあたりの瓦は滑るタイプの瓦なので、屋根の雪は地面に落ちる。TV映像を見ていると、豪雪地帯は皆さんは大屋根にはしごをかけて上でスコップを振っている、なぜ、滑る瓦を使わないのかね。
- ◎2時頃、飯が終わり散策と、買い物と、風呂に行こうと出発した。道の横に止めた車は雪で覆われ、これまた車とタイヤの周辺の雪かきで10分20分が過ぎていく。豪雪地帯の人々の苦労がよくわかる。家を出るたびに、服装に、足ざろえに、交通機関に・・・、オレには想像できない世界だ。
- ◎井波の瑞泉寺（ずいせんじ）にやって来た、ここは前にも来ているが、いい雰囲気の街並みと、京都にあっても引けを取らない大きな寺がある。北陸地方は浄土真宗の地盤だったとあらためて知らされる。ただ昼過ぎから降り出した雪が、じゃじゃ降り状態、フードを被り、傘をさしてもこれでは観光も楽しめない、フラリ一巡して早々に引き上げた。
- ◎寺の前の看板：道宗道（どうしゅうみち）：僧道宗が歩いた道、南砺市の行徳寺と瑞泉寺を結ぶ37キロの古道。蓮如上人が瑞泉寺に法話のため度々訪れていた。僧道宗が蓮如の朝の勤行に間に合うよう歩いた、6時間ぐらいかかったのではと書いてある。現在はトレイルランで有名だそうだ。“瑞泉寺”“井波御坊”二つの単語はなにかと調べると、浄土真宗内での内紛、東と西の内紛の関係だとか、仕様もない話。

- ◎金沢井波線沿いにある法林寺温泉に行った。何度か来たことがある小さい風呂屋、地元の人が多い風呂屋と思っていた。調べると温泉旅館のようだ。一泊2食で1万円足らずの店らしい。風呂屋は久しぶり、550円也を払って中に入る。湯は熱い、身体を洗い、湯船にそして外の露天風呂にと楽しんだ。「おれ 風呂に入らん家の風呂で 総着替えしたい」普段からいつも言っている、山仲間、**「入ろうよ 風呂に入りたい」**とぼやいておられる。労働の後の熱い温泉はなかなか爽快だ。こんな独り言を仲間にかかれたら、「風呂はいいでしょう 風呂に入ろうよ」と言われかねないな。
- ◎三日目の朝、ブルブル、除雪車の響き、国道から下に降りて家の前まで除雪してくれている。今日は今から帰る日、荷を積むのも楽ちんである。TVの天気予報は相変わらずのクモの巣等高線、北海道はまだまだ猛吹雪と豪雪だそうだ。そのあおりで北陸も昨日の午後から雪が降りっぱなし、ふわりとした雪が家のまわりに、雪かきが終わったあとに、新雪が30センチぐらい積もっている。
- ◎飯を喰い、荷を積み込み、金沢市内を走っている。家々の前で、せっせっせと雪かきの人が多くみられる。皆さんスコップやダンプを使って玄関先の雪を除けている。除雪車が通ったあとの道路は両サイドに雪が積まれている。ケチケチ旅、高速道路はあまり使わずにと進む。富山の山をちょっと登ろうかと計画していたが、この大雪では山の麓にも入れないので、福井方面に車を走らせた。
- ◎道路には水がちょろちょろのところもあれば、プンプンのところもある。なかなかうまい考えの融雪装置だけれど、どこからこんなに大量の水を持ってきて、上手に水を撒くのか、不思議な装置だ。
- ◎昭和36年に新潟県の人考えた装置。地下水が漏れ出ている処の雪が融けているのを見て、「道路に 地下水を撒く装置を埋め込んで」と役所とかけあった。暖かい地下水を撒くことで、消雪する装置だ。
- ◎バスとトラックがひっついている、「あれれ 事故 なんぞふたつが ひつつくように ぶつかったのかな」警官やら関係者が10人ほど出ている、手前の我々は動けない。この三日間、たくさんの事故を見た、どこかに乗り上げた車、二台での衝突、それぞれ大事故ではないけれど警官が出て皆さん右往左往している。この時間は多少暖かく舗装道路の雪解け水でビシャビシャしているが、2.3時間前の冷え込んだ時間、凍結した地面は**「つるりんころりん」**と滑りやすい状態、慎重に運転しても止まらない、ハンドルが効かない、「あわわガシャリ」だろうね。
- ◎福井の**“文殊山”**に来ている。こんな雪の日に、駐車場には10台以上の車が止まっている、人がパラパラ降りてくる、地元の人たちが楽しむ山のようなのだ。
- ◎**「長靴で大丈夫みたい」「へえ〜」**一日目、金沢市内でゴム長靴に履き替えてから、けっきょく家に帰り着くまで長靴姿だった。降りてきた人が、「長靴で じゅうぶん 登れるよ 軽アイゼン あったほうが いいかな・・・」車には、登山靴、アイゼン(12本爪)、ピッケル、ワカンに乗っているが、長靴にアイゼンは合わないの、笠とストックで登り始めた。
- ◎雪がどんどん降ってきたので傘をさして登っている。降りてくる何人かの人々とも会う、皆さん傘に長靴姿、軽アイゼンをつけている。近所の街の**“文殊会”**とでもいうのかな、顔見知りの方々の親交の場所、健康の場所、ハイキング、弁当を広げる場所のようだ。
- ◎雪国に来て、三日目ともなると、「降ってきた どこもかしこも 雪だらけ まっしろけ」と感動が薄れる。歩きながら地面の白い雪、樹々の幹半分にへばりついた雪、枝々の上に積もった雪、世界全体がまっしろけだ。先日も、「樹氷が見たい」と関西の高見山に登った、「やっと見れた 樹氷だ」と悦んでいたが、ここにやってくるとすべてがまっしろけの世界、それはそれは美しい、幻想的な幽玄の感動的な世界、いいですねえと想いつつ、「ああ また雪か」と贅沢なぼやきが出てくる。
- ◎1時にてっぺんにやって来た。立派なお堂がある、鐘がある、「失礼して 鳴らしますよ かあ〜ん」いい音が響く。ちょっと晴れてきた、福井の街々が見える、田畑が見える。戦国時代は山城があつたらしい。
- ◎曇り空、ちょっとお陽さんが出て青空が見えると思ったら、風が吹いて雪が舞い散る、すぐにまた大雪が降りだす、この三日間は富山もここも北陸じゅうが、こういう天気の繰り返しのようなのだ。晴れると枝々の雪が舞いキラキラ光る。アウトドアは、晴れの天気が一番だ、お陽さんがいいねえ。
- ◎2時半駐車場に降りてくる頃に、陽が燦々の青空、「おお 三日間ではじめて 晴れの天気・・・感動的だね お陽さんが 出てきた」である。
- ◎帰り道も往路と同様、476号線を進んだ。8号線は日本海に近づくので遠回りだそうだ。今庄から敦賀に、湖西線から名神高速にと進んだ。7時ころに家に帰り着いた。